

# 鮮滿漫筆 一話一詠 (上)

八

葛原しげる

1

この非常時ゆゑに、兒童尊重の話をしに來てくれ。兒童愛護の事が、忘れられ易い戦時ゆゑ、全滿洲の母ミ、小學校の先生方へミ、又、一般の人士へも、約二ヶ月は話して廻つてくれ、ミ、滿鐵から頼まれて、悦んで出かけましたのは、四月二十八日の夜でした。此の日の午後二時、私は、J O A K から、同じ様な目的の談話を、母の講座に放送したのも、此度の講演旅行にミつては、善い首途でもありませんでした。

大連に上陸するか、安東から入國するかとの間には、朝鮮の方々にある拙作校歌を聞きたくもあつたので、「安東から」ミ返事をして、釜山に上陸。大邱にも、大田にもありませんすけれど、それを聞いてゐる日數が、さうしても取れなくて、すぐ京城に入りました。

その前に、「成歡」さいふ驛を通過しました。あゝ、「成歡」の名は、日清戦争の時、幼童であつた私達には、今の「蘆溝

橋」の名のやうに、鋭さく耳底に響いた名です。そして、成歡さいへば、すぐ、「松崎大尉」の名が思出されます。のちには、「玄武門」を破つた「原田重吉」の名もありますが、硝煙の中に軍刀を振翳して突撃する松崎大尉の勇姿は、繪ながら、幼時の私達の眼底には、強く、やきつけられて、今に其のイメージが残つてをります。

成歡は 日清役に覚えし名 勇ましかりし  
松崎大尉

げに、幼時の印象は、四十餘年を経過した今、なほ、四十餘年前のその當時のやうに、新鮮なる感激を、旅する身にも覚えさすのでした。幼児にミつては「あらゆる印象が、一生を支配するここ、今更ではないのですが、小さな驛、成歡に來て、乗合はす人々の中に、恐らく、日清役當時の幼児であつたらう年輩の人を探し出して、その顔色を讀まうとしたこゝでした。驛のすぐ後の丘の上の木立がくれに、

その記念碑は、ありました。急がぬ旅なら、下車して、丘上に立ちましたらうものを。その記念碑も撫して見たでせうのに。

## 2

日の丸の旗は、それこそ、白地に赤く染め出した鮮かさ、まことにあつても目立ちますが、朝鮮を走る汽車沿道の、この小さな部落にでも、家毎に高く揚げてありました。

朝鮮の田舎家は、土の屋根、または藁の屋根、低い建て方で、屋根棟は、山の形でなくて、鈍い曲線が見えて圓いのです。さうした棟の家が、不規則に幾軒か、十幾軒か並んで一部落を成してゐます。その何の部落でも、家毎に、日章旗を掲げてゐるのです。旗日でも何でもない日ですのに。

それは、いふまでもなく、軍用列車を歓迎歡送しての國旗です。私は、此度の旅行に、文部省から、滿洲國その他に於ける日本語教授の視察をも囑託されましたので、朝鮮でも、朝鮮兒童のみの小學校に寄つては參觀しました。そして、今や、朝鮮では、日本語の事を、日本語さいはず、内地同様、たゞ「國語」さいつてをり、運動場でさへ、朝鮮語でなく、國語で、あちらの子供同志に話させてありました。それほごですから、全く、内地の、朝鮮の、さいはず、全く無差別に、立派な日本人の心をもつて、内地から、

滿洲各地へ、出征（？）する軍隊輸送の軍用列車に對して、國旗は掲げたのです。私共は、その心持を、明確に覺り得ないので、幾多の失敗をしてゐるのです。

今春のこゝ、ある有名な婦人家庭雜誌、それは、鮮滿支は勿論、布哇へも、アメリカへも、毎月百數十萬部を發行してゐるのですが、毎號巻頭に、繪入で、時局に關する美談を一二頁づゝ讀切にして掲げてをりますので、平素は各畜家として隣人からも善く思はれてゐなかつた朝鮮人が、三十圓の國防獻金した事を、隣人も驚き、係の人々も驚いて悦んだま報告的の記事さしましたまころ、その主人公には無關係の、在京の一朝鮮人が、

「我々同胞は、今や、内鮮の區別なき毛頭ない。今は、日本國家の非常時であるから、この三十圓獻金者のある事は、不思議ではない。もし、この獻金者が、本來の内地人、日本人であつたら、此の記事にはならなかつたらう。朝鮮人であるが故に、特種の記事にするまは、何事ぞ。我々は、全く、朝鮮に生れ、朝鮮人を兩親さはしてゐるけれども、非常時に處する考へ方は、全く、無差別であるのに、インテリ級である此の雜誌に於て、此の差別感から生れたる記事を見る事は、これが百數十萬もの發行雜誌であるが故に、特に、心外千萬である。」

こゝ、涙を流して、訴へたまきいた。

さもあらう、さればこそ、今、私は、朝鮮の僻地に於て、此の日章旗を見るのであつた。しかも、さうした部落には、可愛い幼児が、軍用列車ではない私達の汽車へ向つても、たまたまた小さな國旗を打振るのさへ、目につくのでありました。

圓棟の藁屋根低き家毎に日の丸高くつゞく村村

竹の旗竿は、低い屋根より高いのが多かつたのです。

3

幼児は、どこでも、いつでも、純真そのものですから、可愛い、美しく特に、朝鮮の幼児は、その服装が、可愛いく美しいです。

一體に朝鮮では大人でも、純白の麻を着てゐます。百姓の野良着にも、白麻を見ます。しかも洗濯好ですから、見るからに清楚な服装をしてゐます。それが幼児になるまで、上衣とスカートとが別色です。多くは、上衣は白、下は黒ですが、それは、珍らしく、眞赤なスカートをはいてゐるのです。所は新村驛を出て直ぐの岡沿のみち、岡には松がつゞいてをり、路は、少しく曲つて畑の中に通じてゐます。そこを行く母子づれです。母の服装は勿論純白そのものであるに、幼児は、眞赤なスカートをはいて、手をひかれて

ゐます。明るい眞晝日に照らされてゐる松林をバックにして、白衣の母と、赤スカートの子とが、靜かに歩いてゐるのです。何となく鮮やかな色の配合であつたでせう。私は、おのづからにして、たま／＼まごまつた此の晝題を悦んで見直した時、此の母子は、立止らうともせず、汽車を見ようともせず、歩み行く歩調を少しも變へず、極めて自然に歩いてゐるのです。幼児の目には、勿論、わが汽車も見えなかに相違ありませんけれど、母が立止つて汽車を見ようと思ふから止らぬのか、母は、我が子が、立止らぬから、立止らぬのか、二人とも、何物にも影響されぬ歩みをつゞけてゐる其の自然味が、うれしいこころでありました。

スカートは緋の幼な兒が新村しんそんの松林ゆく白衣の母と

この新鮮な美しさは、恐らく、土地の名が「新村」といふ事によつても、倍加されましたらうか。よい名よ、新村。

4

これは、また、幼児を脊負つてゐる女——脊負ふといへども、朝鮮の脊負ひ方は、日本のとは違つて、ひきく低く落して負ふのです。脊は負ふのでなく、腰に負ふともいひませうか。だから、「脊負ふ」といはないで「腰負ふ」とい

ふべきところ。だから、脊中ではなく、腰に負はれてゐる幼児に乳を飲ます爲には、母は抱き直す事もなく、幼児は腋の下から首を伸ばして、乳房に吸ひつく事も可能であるらしいのです。婦人の上衣は極めて短かくて、僅かに乳房を隠してゐる程度ですから、胸元を開いたりする勞はないらしいのですから。

さて、朝鮮婦人は、内地でも島の婦人がするやうに、品物を頭に載せて、直立の姿勢で歩いて行きます。その習慣が婦人に多いからか、誰かゞ謂ひました。「朝鮮では腰の曲つた老婦人に出會つた事がない」。ところで、この婦人は、しばらく汽車を見て立つてゐましたが、何の表情もなく、只、見て立ちつくしてゐるのです。脊の子が重く、頭上の水甕も重かつたからでせうか。それにしても、何さいふ無表情でせう。汽車が来ようが、走らうが、自分は、子を負うて、大きな水甕を頭に置いて、歸りゆくべきわが家まで歸りつけばよいのです。他には何の考も何の用事もないのでした。

子を脊にし大水甕を頭にし汽車見る女事も  
無げなる。

朝鮮婦人の洗濯好は、既に述べたさほり、如何にも洗濯好であり、また洗濯上手です。水は、たつぷり鹽に汲み入れてから、洗濯するのでなく、洗濯物に水を浸しては、棒で叩くのです。最近評判の『綴方教室』にも、正子の家の裏の井戸のほごりの水溜で、洗濯物を積んで棒で叩いてゐる鮮女がありました。全く、あればかりの水溜りでも、汚なしさしないで、その水で、洗濯してゐるのです。しかも、正子が何さわめかうが正子の母があんなに、いら／＼してゐるやうが、振向きもしないで。

しかし、本来の洗濯は、川の流に集つて、幾人もが竝んでしてゐなくては、女らしくない程、皆よく川岸で洗濯するので。中でも谷川の水は、多く清澄ですもの。しかも、その洗濯物は、必ず白いのに限つてゐるのか、と思はれる程、きこで見た洗濯女も、いつ見た洗濯女も、白いのを、叩いてゐました、勿論、彼女たち自らも白い衣を着て。

谷あれば 谷に水あれば女あり 女は  
白き衣洗ひあり

きは、ちぎ、いひすぎですけれぎ若し、幼児を連れての旅だつたら、

「なぜ谷には、水が流れてゐるの。水があるさ、なぜ

女がゐるの。女は、なぜ、洗濯するの。洗濯は、なぜ、白いものばかりするの。」

「怪しむのであつたでせう。そして、さう問はれたら、何ご返事すべきものでせうか。」

## 6

耕地整理の出来てゐるころ、出来てゐないころもある水田つゞき。走る汽車の窓から見渡して、目に入るものは、ひよろ／＼伸びたポプラの並木です。全く、ポプラは、ひよろ長いこゝです。内地のだつて、ポプラは、長いにきまつてゐますけれども、朝鮮のポプラのひよろ長振は、チビカルです。ポプラの標本、ポプラの特徴、ポプラのポプラらしさ。

わけて、まだ春末のこゝ、山々の木々は、芽組みばかりはしてゐても、まだ葉を出さず、冬枯のまゝに見えてゐる雑木山ばかりなので、木らしい木は、ポプラばかりでした。

半島の山の木々はまだ伸びざれば目立つは

路のひよろ長ポプラ

鳥なき里の暹嶺ではないけれど、木は元來は山にあるゆゑに、ふさはしいのに、路傍にありながら、いかにも痩せて、風にも堪へ難う、細々々危なつかしいのに、

「遠からんものは目にも見よ、近からんものは音にも聞け、おれこそは、半島の特産として名も高き、せいたかのつぼのひよろ長ポプラ。」

さばかり、足に爪立ち、首のばし、痩せ腕ながら打振つて差し上げたか……力無ちからなのその腰つき少しの風にも、足も怪しく、全身、ゆらり／＼しそれほぎではないけれど、中には、竹にしては、曲つてゐるよ、ミ、目を見張らすほぎのもあつて、珍らしいこゝです。幼児が見たら、又問ふのでしたらう。

「どうして、ポプラばかりなの。」

「どうして、ポプラは、もつこち、太くならないの。」

## 7

一人旅のつれづれには内地でも驛の名も、その附近の自然さを見比べて、なぜ、その名があるか考へ合せて見るのも面白いこゝですが、朝鮮の水原すわげんあたりには、水田が多くて、ひさり、ほくそゑんだこゝです。中でも「一山」さいふ驛を通つて、すばらしい名ださ悦んだこゝです。勿論、山さいふほぎの山でもなく、また、岡つゞきのこゝにも、特別高い岡があるのでもなく、みな、大した特徴もない平々凡々の山なみ續き、少くも汽車の窓からは、さう見えたので、その「一山」の名の由來を問ふ程の熱心も、地圖か

書物かについて調べて見る程の必要も、今はなくて、唯よい名、面白い名を以てのみ、ノートしました。そして見るまでもなく見た驛舎の軒下に、また、プラツトフォームの日あたりに、小さな鉢植が三つ四つ竝べてあつたのが、目に泌みました。

「盆栽」は凡そ人の昇降の多い「停車場」には不似合な閑文字です。しかも、みな、よく花が咲いてゐるではありませんか。由來、盆栽は、御隠居様の暇つぶし、こも考へられるのに。内地にしては、紀州の高野山への電車の中で、さる小さな驛で、紫の花、紅の花、さりませて、これは、地面に植えてあるのが嬉しかつた事がありますが、これは、盆栽です。きつミ、事務機の端に、据えて眺める善良なる驛長さんは、部下の机の上にも、置き替へてやるのでせう。あんな老驛長が一山縣には居るのやらミ、見廻すミ、ここにも、善良そのものゝ様な老いたる人は見えなかつたのが、また別の意味に於てうれしい事でした。木を愛し、花を愛する人は、きつミ、人生を愛する人です、公益に心して、日も夜も、乗る人降る人を愛し、驛の仕事を愛する人です。この程職に一生を注ぎ込んで、おちついてゐる人、相違ありません。

一山は驛の名にして盆栽に咲かせ

たり若き驛長

花の名ミ、その色ミは問ふなかれ。

8

朝鮮の山に、里に、殊に、野に鳥もるませう、雀もるませう。しかし、汽車に乗つてゐては、それらの小鳥は、もし居ても目に入らず、氣がつかないのです。その上、鳥も雀も、もし居ても、嬉しくも珍らしくも、ありません。唯、極めて稀に、何の鳥か、何の木かに巢をかけておぐが目につくばかり。巢があるからは、きつミ居るであらうに、鳥が動いてゐないから目につかないのです。ところが、さる里の水田に、きよさん立つてゐて、これも動かないのですが、たしかに一羽鳥の形をして、白いのが、よく見るミ、嘴の長いのが立つてゐるのです——かねて聞く、朝鮮には鶴が野生で居る、ミ。しかし、幼児は、鶴は、公園でも、繩張の中にをり、動物園の金網の中にあるミのみ知つてゐるのですから、野にをるあの鳥は、何、ミ問ふにきまつてゐます。

はねじろ くらほしなが  
羽根白に嘴 長の鳥は何 いミのきやかに水田 すんてん  
に立つ

脚も長いのにきまつてゐますが、目につきませんから、さりあげないのです。空にも一羽、高く、喜んでゐました。乗合つた内地人は、口々にいつたことです。

「鶴ですね」

「鶴ですよ」

しばらくするに、

「朝鮮の空には、鶴が飛んでゐるんですね」

「さいふ人があるから、」

「田圃にも下りてゐますよ、あそこに、立つてゐますよ」

と、いつてやりました。そして、

「のんびりしてゐますね」

さいつたら、一三人、笑ひました。その笑は、何が、のんびりしてゐるさ聞いたのでせう。私は、鶴が、のんびりしてゐる、さにはあらで、朝鮮の空氣そのものが、のんびりしてゐる、さいつたのでしたが、さう聞いて、笑つたかきうか、少し氣にかゝりました。そして、次に私は、東京澁谷の友人の宅の應接間に、その友が朝鮮で高官をつとめた時代の、何かの紀念に、何か會から贈くれたさいふ剝製の鶴二羽が、いつも、竝んで立つてゐるのを思出して、今、空に見えなくなつた鶴も又、さつきの水田の鶴も、いつ、さこの應接室に、剝製にされて立つ運命の下にあるさも知らでゐるだらうと思ふさ、ひさり、心の中で、笑ひそこね

ました。乗合つた人は、窓の外を見つゞけてゐましたが、「なるほご、幾羽も、下りてゐますねえ。へえさすがに朝鮮ですね」

さ感心してゐました。

野生の鶴さいへば、六七十年昔、私の郷里の家の門前に先年まであつた大松に、鶴が飛んで来てはさまつたのを、若い時の父が、種ヶ島で討ち落して、その羽毛を、母が織り込んだ緑色の羽織があつて、私は、少年時代に、一二年間、着せられました。するさ、村の友人さもは「一本くれ」「一本くれ」さ、織り込んであつた鶴の羽毛を、手にく、抜きさつては、フーさ吹いてさばして、追つかけて遊んだささがあります。のち、六つか七つ年下の妹が、それを着せられた頃には、もう、羽毛は、殆んさ無くなつてゐるた事なさ思ひ合して、私自らも、いさ、のんびりさした汽車の中でありました。

## 9

白装束の農夫、女農夫、しかし、若いさは見えないのが、只一人、おそらく黙々さして蹠をさつてゐるのであらう彼女は、紅一色の頭巾の大黒暗めくのを冠つてゐるのは、繪にならないでせうか。時は春。よく晴れてゐる日でした。

耕すに紅の帽 美しく春日の畑に白衣の女

10

滿洲では、畑を耕す一つの仕事に、馬三頭、時には子馬も加はつて四頭で一挺の農具を引張り、農夫は一人で馬をも使役してゐても、すぐ後につゞいて、種子を蒔くもの、又、それを脚先で埋めるもの、そして四人目には、子供が従いて歩いてゐるのさへあつて、珍らしいのですが、朝鮮で、一つの仕事に、複數で助勢してゐるのは、鍬が大きくて重いから、でせう。太い繩を二本つけて、前から二人で引張つて、放す時、ぐつと地面に打ち込んで土を返すのですが、深く打ち込んだ太い鍬を、地面から引き抜くのが、非常に重いから、前から繩を二本もつけて引つ張らせるのです。これは、なるほぎね、です。低い溝から水を汲み上げるのにも、上の田にゐる若者か、女かど、繩で引張つて、下にゐる農夫の手の桶の仕事を易からしめるのです。水汲さいへば、ブリキの罐の左右に二本づつ、長い繩をつけたのを、二人かなり遠く離れて、左右の手に持ち分けて、調子をつけて、フラーリ、罐を振つては、樂々、水を汲むリズムカルな勞作も、珍らしいものでした。あれには、水汲み唄もほしいと思ひましたが、この太い鍬での土ほりかへしには、唄どころではありません。殊に、農夫、それは、

額に長々、白い髻を豊かに貯へて、大人めく風貌も上品な人柄、いふまでもなく、白衣をつけてゐました。

太鍬に太繩二筋つよく引かせ土かへしをる

白髻農夫

11

もさ／＼そんな深い考があつたのではなく、只、見たままを詠んだのでした。それを、

「面白いですね、ふーん、松楓はなるほぎ、文化の進んだ民族で、雑木や、草は、——ふん、面白い。五族協和さいふけれぎ、當分は、協和でよくて、競争させませんさね、なるほぎ、面白い表現ですなえ」

さ、いたく感心されて、作者いさゝか、たじろぎました。それは、朝鮮でなく、吉林で、さる大人、（これは本もの）から書畫帖を押しつけられて、困つて、書き習はぬ毛筆をこつて、よごしたのが、

松楓落葉松を植ゑませて伸びきそはすか雑木松山

の一首。もさ、これは、五族協和の滿洲で詠んだのではなくて、朝鮮の汽車路に見えた、何處かの實景、否、實感

なのです。松でしたが、楓や、落葉松は、まだ苗木を植ゑて年も経たないでゐたので、何の木か、實は明かではなかつたのを、五七五にしなくてはならぬので、「松楓落葉松」をこしてしまつたけしからぬ、歌なのです。只見たまゝこいふよりは、思つたまゝなのです。それを、

「さうしても、歌は、このまほり、かくれた意味が豊かでありませぬ、人を動かしませんから、『……伸びきそはすか、雑木松山』面白いですナ。いや、有り難うございませぬ。」

「自分の書畫帖を押し戴いて、ふくさに包まれて、また、禮をいはれて、くすぐつたいこゝでした。私もいさゝかてれました。」

## 12

汽車さいふものは、野中を、一文字に、只走るもの、かうきめてよいのは、驛ミ驛ミの中間で見る汽車です。

汽車さいふものは、大きな荷物でも、たくさんの人でも、積んだり下したり、乗つたり、下りたるする箱の繋がつてゐるもの——ききめてよいのは、驛で見る汽車です。

ところが、野中で汽車が止つたのです、驛ではない所で、長い大きな汽車が、走らなくなつて、急に出來た土手のやうに、畑つゞきの野の真中に、黒々横はつたのですから、

驚いたのは鳥です。何物にも妨げられないで、思ふ存分、畑の植え物に、埋めて施された肥料の美味を、嘴の先で、つゞき出し、掘り返しては、失敬してゐた鳥です。大きな鳥二羽、互に、繩張の範圍をきめて、相犯さぬこゝにして、稍隔つて、働いて（？）ゐるた二羽鳥です。恐らく、夫婦鳥。さつきまでは

「さうだえ。お前の方には、おいしい肥料が埋めてあるかね。」

「はい、掘りさへしますさ、いくらも、出て参りますわ。」

あなたの方は、如何ですか？」

「おれの方も、たくさん出るよ。何なら此方へお出で。」

「はい」

「極めて圓滿な御兩人、ではない御兩鳥（？）艶々しい漆黒の羽毛の頭。雄は七分三分けた頭髮でなくて頭羽毛、雌は、カールが嫌で、パーマメントにはしないで能く揃へてある斷髮姿も、きちんとして、でも、おしろいも、おくろいもつけ様のない顔で、紅をさした唇でなく、眞黒い嘴で、今更、汽車に驚いた雄が、

「おい、これは、さうした事だ。走り來り、走り去るにきまつてゐる汽車が、おれ達の領分の中で、止つたぞ」

「はい、きつゝ汽車も、お腹が、へつたので御座いませう。この肥料を、少し、分けて差上げませうか。ね、

あなた。」

「これく、何をいふ。それどころぢやないぞ。これは、おれ達、夫婦を、討ちに來たのかも知れないぞ。それく、人間が一人、二人、また一人、三人も下りたぞ。」

「いえく、おれは、機關手さんさ車掌さんさ、——それから！」

なきく、咄し合つてゐるらしい大鴉。

何事ぞ汽車動かさず大鴉 頭を上げて鳴きかはしをり

こんな事は、たまさかに内地でもありますが、廣いくの野の真中であり、大鴉ですから、いさゝか、朝鮮の感じもありませんか。

野雲雀の聲も聞えて鶏の聲も聞えて汽車さまりをり

これは、全く、内地の気分です。しかし、これも、朝鮮での實景實感なのですけれごも。

13

かなり遠く行く親子らしい老人と少年だけが、私と同じ室に乗合せました。老人は、かなりの老人で、少年は十七

八。荷物も多いのですが、風呂敷包の大きいものもあり。現代のトランクもあります。それよりも、その少年の老人へのサービスが、如何にも行届きますので、私は、心に憂めては、時々、見たり、聞いたりしてゐましても、朝鮮語を知らぬ私は、言葉のかけ様もなく、隣席に相並んで、揺られ合つてゐました。

しかし、さうしても、その親子振の善さが、私をして、遂に、モーションを起させました。老人が、巻煙草にも飽きたらしい。窓外の景色も興なげに、半ば居眠りもし、欠伸びも半分にして、思出しては、言葉少なに少年に話しかけて、すぐ黙つてしまふので、私は、東京驛で、見送つてくれた私の可愛い教へ子の一人から貰つた小さな罐入の、榮太郎の黒飴を進めて、

「東京のお菓子、一つ、如何ですか、お父様へ——」

さいつて、毒味をする意味で、私も一つ口に入れて見せました。するさ少年は

「ありがたうございます」

さ鮮かな日本語でいつて、さて、父に、それを傳へたらしく、改めて、私に向つて、父の返事を通譯して、

「ほんきに、御親切で、ありがたうございますが、年寄で、齒が十分でないから、固いものは頂けませんから——」。さいふのです。なるほぎ、黒飴は一見小石のやうに固さう

行きし老教主はや

です。實際、噛めば、固いのですもの。そこで、私は、

「しがし、飴ですから、噛まないでも、きけて、おいしいですよ」

「いふも、又、それを通譯したら、老人は私に笑ひかけました。少年は、すぐ、

「では、御親切に甘えて、一つ頂きます。」

「頭を下げて、一つ取つて父に渡すも、父は、再び私に笑顔を見せて、それを口に入れた。私は、少年にも進めました。」

「いゝえ、私は、よろしいです。私は、よろしいです。」と固辭する温良さが、私を、また悦ばしましたが、強ひて一つ進めました。

さて、老人は、しきりに、私に話しかけるのを少年が通譯して、一時間ばかり愉快に話しましたところ、老人は、天帝教さかの教主、年は八十を越してゐるのに、私を食堂へまで案内して、さて、私より早く汽車を下りる時、私への挨拶が、極めて、お世辭めかないで、甚だ結構でした。

「鯛の頭も信心から」さきゝます。何でも、一つの信仰さなるも、強大なものになり、眞直ぐにもなるところが、人の心を打つのでせうか。

いつまでも話してゐたいに残念さ乗りかへ

私は、五分間停車のある驛のホームに竝んで一緒に寫した寫眞を、送つて上げる事を忘れてゐました。約束を果さないも、日本人に、コーテシイなしも、慥がれては、たまりませんから。

(七頁よりつゞく)

繁榮上御同慶に耐へません。七分搗米や胚芽米の胚子は一般に消化が悪いのですがお子様方の大便の中に胚子が其儘出たからさいつて心配する事はありません。相變らず七分搗米を食べさすべきです。消化作用をたすける榮養素としてビタミンBがあります。これを多く含んでゐるのは穀類の糠、胚子、ソバ粉、豆類、チシヤ、キャベツ等の葉菜類、人蔘、ノリ、肉類、特に多いのは酵母で消化管をシゲキして消化を盛んにし腸を整へます。特に夏分はビタミンBに注意いたしませう。

最後に總ての消化吸収作用は精神的な條件により非常な影響を受けます。楽しく食事をする時には消化液の分泌もよくなり、消化力もよくなつて來ます。食卓を氣持よくする事は非常に大切な事です。